

慶應義塾大学教育奨励基金

絹織物「銘仙」をアップサイクルした衣服 製作を通して、文化継承をはかる ～郷里群馬県伊勢崎市の衰退産業・文化に新しい提案を～

総合政策学部4年

71708181 村上采



1.はじめに

筆者である村上の郷里、群馬県はかつて世界遺産である富岡製糸場が代表するように、殖産興業¹の中心地であった。蚕から生糸を紡ぐ養蚕業から、その生糸を使用し織物を生産、着物を仕立て、全国、そして世界へ輸出していた。今回の研究で焦点を当てるのは、地域を発展させ、多くの人々を魅了していた絹織物「銘仙」である。しかし、銘仙は市場の縮小と職人の高齢化によって現在は衰退し、生産が不可能になっている。そこで、着物として継承する方法にプラスして、洋服として日常に取り入れるという選択肢を提案できないかと研究を進める。

2.銘仙とは

銘仙(めいせん)とは、大正から昭和にかけて日本全国に普及し一般女性のふだん着やおしゃれ着として愛された着物です。銘仙の主な産地は北関東。桐生、足利、秩父、八王子、そして伊勢崎。奈良時代から養蚕が開始されたとされる群馬県の「伊勢崎銘仙」は中でも生産量が多く、明治から昭和時代にかけて日本全国10人に1人の女性たちが着ていたと言われるほどでした。伊勢崎銘仙の魅力は、「併用緋」によって成される独特な模様と発色の良さです。併用緋とは、たて糸に色柄をつけるだけでなく、よこ糸にもつける(捺染)、手ばた機でたてとよこの糸を1本1本併せて織る技法です。たて糸、よこ糸ともに柄があるため、柄を出すための高度な織り技術が必要でした。しかし、かつて盛んに生産されていたという銘仙も、現在は着物文化の縮小や後継者不足などを背景に銘仙業界自体が落ち込んでいます。

3.研究内容

現状: <織物を着物にする>という選択肢のみ。生産不可能とされているが貴重な着物は保存されており、ビンテージ着物は市場に出回っている。

仮定: 着物以外の選択肢=衣服を提案することで、銘仙の文化継承は可能になる

現段階での結果: 可能性はある

¹

明治政府が西洋諸国に対抗し、機械織工業、鉄道網整備、資本主義育成により国家の近代化を推進した維新政策を指す。狭義では明治政府による新産業の育成政策を指す。



着物を衣服に生まれ変わらせる

<方法>

地域の高齢者からビンテージ着物銘仙を仕入れ、それを解し、布にする。衣服のデザインをし、銘仙の布を使用する。

<特徴>

一般的な衣服製作は生地幅が広いが、着物の幅は35cmほどしかないためデザインが難しい。また、ビンテージ着物なので汚れや傷が目立つ。

オンラインワークショップ実施

<方法>

衣服生産の際にでた銘仙のハギレを再利用してカスタムタンブラーを製作するワークショップ。

<ワークショップ内容と目的>

銘仙の歴史や文化についての説明・講義、実際にハギレを使ったものづくり、ディスカッション。着物

文化に学ぶサステナブルや銘仙文化の発信が目的。衣服以外にも日常的に使うものを作成し、可能性を探る。

<結果>

銘仙という文化を地域外に発信する良い機会になった。参加者からは「銘仙を知らなかったけれど日本にこのような素晴らしい文化があったことに感動した」など声をいただき、銘仙を日常で楽しむことができれば可能性が広がると感じた。

4.まとめ

銘仙の可能性を広げることができる研究になった。着物としての衰退がある一方で着物以外の活用方法がある。衣服や小物として日常に取り入れることができるのであれば、銘仙を復活させ継承することができるかもしれない。研究はまだ初期であるが引き続き活動を継続させていきたい。